

横浜中華街の言語景観における漢字字体顕在化モデルの構築：社会・文化、技術、権力の可視化

石井 諒太（東京科学大学 環境・社会理工学院）*

Developing a Model for the Manifestation of Chinese Characters' Glyph – Visualisation of Society, Culture, Technology, and Power –

Ryota Ishii (School of Environment and Society, Institute of Science Tokyo)

要旨

本研究計画における言語資源は、書記言語のなかでも文献言語とは異なり、看板・標識などを主とする言語景観（景観言語）である。社会生活に密着した言語で、公共メディアに現れる言語資源である。書記の過程に関わる主体には書記者の他に、その媒体の所有者、言語政策等の関連する規制、書記の道具・技術が存在する。そこで本研究では、横浜中華街の言語景観における異なる漢字字体の使用に注目し、これらの主体と文字顕在化との関わりを示す。これまでに、文字体系（中文繁体字、英語ローマ字など）と、言語標示の類型（注意書き、店名標示、メニュー・ポスターなど）を言語資源として収集し関連を分析した。今後は、書記者・所有者に対するインタビュー調査を実施し、書記の社会・文化的動機や技術的背景、字体に関する識字能力や出身などとの関連、そして書記にあたっての課題を分析する。

1. はじめに

本稿は『言語資源活用ワークショップ 2026』インタラクティブセッションにおいて筆者が議論の題材とするフィールドサーベイについての研究背景・計画を整理したものである。当日のインタラクティブセッションでは、予備調査の報告も踏まえつつ、今後の調査内容・方法について、参加者の皆さんと多角的な議論を行う。

2. 都市景観のなかの言語資源

2.1 文献言語と言語景観（景観言語）－書記言語における位置付け

言語資源は話す・聞く行為に依る音声言語（話し言葉）と、書く・読む行為に依る書記言語（書き言葉）に大別できる。後者の書記言語については、さらに、書籍・文書・日誌・手紙など紙を主な媒体とする「文献言語」と、看板・標識・銘文・落書きなど都市空間を媒体とする「景観言語」に分類できる（彭 2023, 高田 2011）。景観言語を対象とする研究は、Landry and Bourhis (1997) によるカナダ・ケベック州の言語景観と言語集団の心理・行動との関定

* ishii.r.7a38@m.isct.ac.jp

量的分析に始まり、社会言語学の新しい研究領域として世界的に広まることとなった。初めて「言語景観」(Linguistic Landscape, LL)という語が登場したこの研究では、言語景観について「特定の領域・地域の公共的・商業的標示における言語の可視性と顕著性」という概念的定義とともに、より具体的な要素として「公共の道路標示、広告看板、街路名、地名、商業店舗の看板、および政府建物の公共標示（の組み合わせ）」であると定義している (Landry and Bourhis 1997)。この定義はその後の言語景観論文でも広く引用されており、言語景観研究の基礎となっている。日本語文献でも同様の定義が踏襲されており、庄司ほか (2009:p. 9) は「公共空間で目にする書き言葉」とし、ダニエル (2010) は言語景観を以下の四点から特徴づけられるものと定めている。

- 言語景観は文字言語（看板や店に並ぶ商品のラベルなど）であり、音声言語（その商品のためのラジオ CM や電車内のアナウンスなど）ではない。つまり、言語景観は視覚的な情報であり、聴覚的な情報ではない。
- 言語景観は公的な場に見られる文字言語（店舗のショーウィンドウにある看板など）であり、私的なコミュニケーション（個人間で交わされる文通や電子メールなど）ではない。
- 言語景観は不特定多数の読み手に発されるもの（商店街のポスターなど）であり、特定の個人宛てに書かれたもの（自宅のドアにテープで貼られた言付けなど）ではない。
- 言語景観は自然に、受動的に視野に入るもの（駅売店の雑誌の見出しに使われている語句など）であり、意識的に読まなければならないもの（その雑誌の中の記事など）ではない。

2.2 言語景観研究の主題

前節で触れたように、言語景観を言語資源として研究対象とする試みは、Landry and Bourhis (1997) に起源をもつが、これは社会心理学を基礎としつつ言語政策・言語計画に関する論文であった。その後の言語景観を扱う研究は、言語政策や多言語状況 (Multilingualism) を主題とし、社会言語学の一分野として広く発展している。世界各地で様々な目的によってなされる言語景観研究は、総じて評価すれば、「言語選択、言語階層、言語接触、法規制、識字の諸相などに焦点を当てることで、社会における言語に関する知識に新たな視点を与えることを目的とするものである」(Gorter and Cenoz 2024)。

2.3 言語景観研究の課題

言語景観研究の課題は多岐にわたるが、特に以下の点が挙げられる。

- 言語景観の集計の方法論の確立
- 言語景観とその背景に存在するアクターとの関連性の探求
- 言語景観のテクノロジーによる影響の考察

言語景観の定量的な収集を図った研究は Backhouse (2006) が顕著である。Backhouse は山手線の 28 駅を選び、駅周辺区域から信号二つ分の区間の道路の両側にある全ての標示を収集した。合計で 11,834 個のサンプルを収集し、そのうち 2,321 個の多言語標示を分析の対象として、公的 (official) と民間 (nonofficial) という区分を導入した際に異なると特徴がみられる

ことを定量的に示した。言語景観の定量的な収集は、言語景観研究の方法論の確立に寄与するものであるが、Backhouse (2006) を含めた従来の研究の限界として、収集する地理的範囲と選択基準が明確ではない点、またどの言語景観を収集しどれをサンプルとして含めないのかという基準が明確でない点が挙げられる。つまり定量的な分析の際には、前提となるデータ構築に恣意性が介在することが問題となる。

言語景観の背景にいるアクターとの関連性の探求は、言語景観研究の重要な課題である。ここでいうアクターとは、言語景観が顕在化するまでの間に関わっているさまざまな主体のことを指す。Spolsky (2009) は、言語景観の形成に関わる主体がこれまでの言語景観研究で考慮されていないことを指摘している。Spolsky は「参加者」(participants) として、言語景観の書記者 (writer)・所有者 (owner)・読者 (reader)・言語統制機関 (language management authority) を観測することを提案している。

世界的にも（今でいう）言語景観への注目が早かった Masai (1972) の研究や上海の言語景観の写真データを 100 年前まで振り返って記述・考察する彭 (2023) による研究では、いくつかのサンプルや時代背景を踏まえると－文章中に明示的に記述されてるわけではないが－商業的看板や街路名等のいわば＜手工芸的＞な言語景観が多くを占める。しかし現在の言語景観は、印刷されたものも手軽に個人で制作することができる。＜デジタル化＞された言語景観は、その背後まで注目すると、文字入力に関わる技術（テクノロジー）が言語選択や文字選択、そしてフォントなどの文字スタイルに対して、書記者を通じて影響を与えている。テクノロジーは人々の可能性を拓けるが、同時に制約をもたらすこともある。その例として、文字コードの制約によるギリシャ語でのラテン文字書記 (Ivković 2015) や、QWERTY キーボードの制約によるセルビア語での非標準のラテン文字書記 (Androutsopoulos 2012) などの（かつての）慣行が挙げられる。つまり、「参加者」に加えて、テクノロジーも言語景観の形成に関わる要因として考慮する必要があるのである。

3. 漢字字体顕在化を巡る書記行為の研究

3.1 日本語学における新旧字体への注目

漢字の異体字に対する字体選択－例えば「学」と「學」－に関する研究は、字体への個人の好み（選好）・なじみ（親近度）について、心理的要因として単純接触効果を指摘する計量的調査や国内地域差に注目した研究が日本語学のなかでなされてきた (横山ほか 2006, 横山 2012)。もちろんここでは日本語の書記における新字体と旧字体を比較するものであるから、中文（中国語）繁体字や中文簡体字は選択肢にはなく、それらが比較されることはない。

漢字を歴史的に用いてきた漢字文化圏－日本と中華圏の他に朝鮮と越南を含む－のなかで、言語の境を超えた漢字書記に注目した希少な研究として、高田 (2014) が挙げられる。高田は台湾の日本語学習者に対して、日本人に日本語の文章を送る場合を想定した場合の、字体や活字デザインに差がある漢字字形に対しての選好を調査した。調査結果より (1) 字体レベルの違いでは、日本人が日常的に使用する漢字字体の推測・類推が選好に影響を与え、(2) 筆画の微小な差を反映した活字デザインレベルの違いでは、初等教育以来接してきた字形が選好に影響

響を与えることがわかった。

3.2 横浜中華街の言語景観研究

この節では筆者がすでに実施した横浜中華街における表面的な言語景観収集・分類調査の概要を紹介する。

Ishii et al. (2024) は横浜中華街において研究を行い、対象エリア内の全ての言語(language and signs)を収集し、言語・文字体系の類型化(ex. 中国語簡体字、英語ラテン文字)、標示物の類型化(ex. 集客用提示物(メニュー・ポスター)、施設・店名標示、案内標示)、そして標示物と文字体系の相関を量的に示した(n=901)。記録したサンプルの一部を画像で以下に示す(図1)。



図1 横浜中華街の言語景観の例

横浜中華街の言語標示を読み取る来訪者の属性や該当地区のまちづくり協議会(横浜中華街発展会)によるまちづくりの施策や規制の有無を、文献調査および関係機関への問い合わせにより解明した。以上のこれらの調査を組み合わせることで、横浜中華街においては中国語簡体字が情報を正確に伝えるための伝達的な機能を果たす一方で、中国語繁体字が雰囲気を醸成するための象徴的な機能を担うことを明らかにした。

4. 漢字字体顕在化モデルの構築

前節で述べたように、横浜中華街の対象範囲のなかで言語景観を収集する定量的な調査は完了した。ここでは、言語景観を捉える一般的な構造の仮説として漢字字体顕在モデルを設定し、横浜中華街の言語景観における漢字書記を通じて、都市をメディアとした書記空間(言語景観)の背後にある構造を明らかにする研究計画について述べる。

4.1 漢字字体顕在化モデル

本研究計画の仮説となっている漢字字体顕在化モデルは図2で示される。ここでは、2ページの2.3節で述べた言語景観に関わるアクターとして、書記者・所有者・読者・科学技術・オーソリティーが含まれている。書記された(顕在化した)文字には、社会・文化的背景・動機が託されている場合がある。その際には、発信者(addresser)のアクターとしての書記者+所有者と、受信者(addressee)のアクターとしての読者は、社会・文化を共有する一平面に所在すると解釈される。

本研究計画は、このモデルを仮定して漢字字体顕在化の背景にある社会・文化的動機、さ

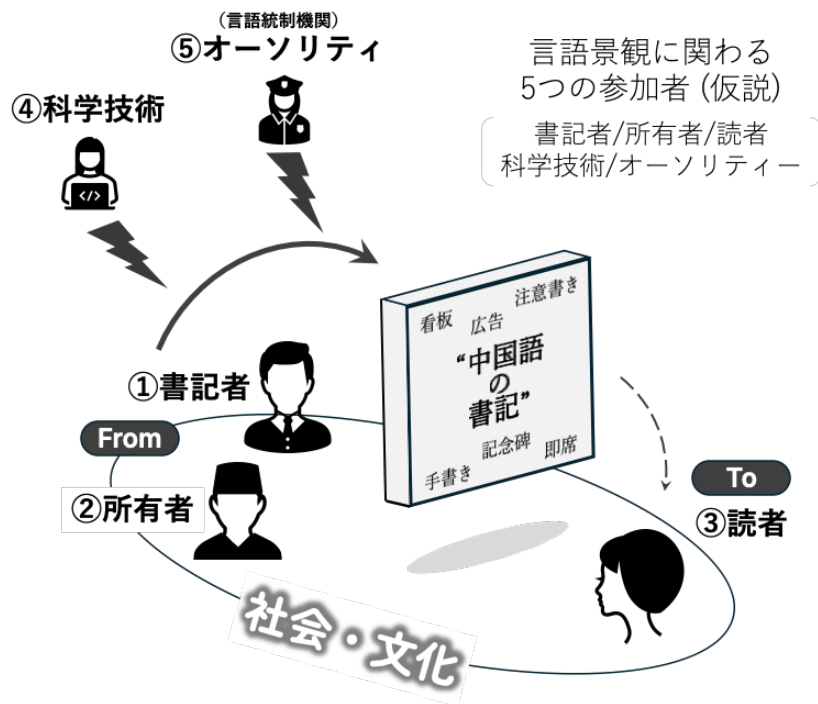


図2 漢字字体顕在化モデル（仮説）

らに技術的背景とオーソリティーによる影響を捉えることで、言語・文字が都市空間に現れるまでのプロセスを明らかにすることを目的とする。

言語景觀は、日常的な社会生活における生きた言語そのものであり、その中でも音声言語ではなく書記言語でありながら書籍・新聞・手紙等の文献言語とは異なり、公共性を満たすメディア空間に現れるものである。したがって以上より本研究は、精緻な書記活動とは異なり、社会生活に密着した書記活動の理解に貢献し、また技術的な課題を提示することができる。

4.2 フィールドサーベイの計画

漢字字体顕在化の背景にある社会・文化的動機、さらに技術的背景とオーソリティーによる影響を捉えるため、前節で述べた漢字字体顕在化モデルを想定し、以下で示すようなフィールドサーベイを計画した。

4.2.1 標本（サンプル）

調査対象者は、日本語使用者に対して中国語が提示される商業空間である横浜中華街における、言語標示の所有者・製作者である。横浜中華街を対象に作成した文字体系別・事業タイプの店舗リストを用いる。使用言語・文字が一貫している業種（食べ放題中華料理店・占い店）に対してはあらかじめリストからランダム抽出した事業者を標本とし、そのほかは研究担当者が母集団を代表する標本として任意に選んだ事業者を対象とする（有意抽出法）。予定しているサンプルサイズは25である。なお、25の事業者のうち最初の5事業者に対する調査は予備調査とし、その後の20事業者に対する本調査を前に、サンプルサイズや、調査時間、質問票

デザイン、調査対象者に対するアプローチ方法の再検討を行う。

4.2.2 調査方法

調査対象の事業者に対して、対面で調査参加の依頼を行う。調査対象者とアポイントメントをとり質問票に沿って研究担当者が記入を行うインタビューを実施する。どうしても対面での接触が困難であれば同意書と質問票を記入していただき後日回収しに伺う。

質問リストの概要は以下の通りである。

- 「メニュー・ポスター」と「店名表示」の文字に関する質問
 - － （それぞれに関して…）
 - － どの文字を使用しているのか
 - － どの順番で使用しているのか
 - － 文字選択と順番の明示的な理由
 - － 最終的に誰が制作したのか
 - * 自分で製作した
 - * 発注した→誰に／いくらで／どこまで自分でデザインしたのか
 - － どのような方法でデザインしたのか
 - * 自分の PC で→使用したソフト・フォント・文字入力方法・翻訳ソフトの使用有無
 - * 手書きで
 - － 発注した場合は、どのように発見し、どのような依頼を行ったのか
- デモグラフィック項目に関する質問
 - － 出身
 - － 母語（第一言語）
 - － 教育課程で学んだ漢字字体
 - － 日常的に用いる漢字字体
- 自由なりフレクション

4.2.3 結果の分析方法

インタビュー調査により得られた結果を集計し、実際の文字使用とその動機や技術背景、デモグラフィック項目との相関を分析する。さらに得られた技術的な課題を整理する。

5. おわりに – LRW2025 に向けて

発表時点で実施済み予定の予備調査の結果を踏まえ、調査方法・項目について参加者の皆さまとともに活発な議論を行う。また、本研究の目的・意義について、視野が不足していることも往々にしてあるだろう。そもそもこの研究がどのように位置付けられるのかという点についても、皆様のご見識を頂戴したいところである。

文 献

彭国躍 (2023). 『都市空間の言語生態：上海の言語景観と道路命名の歴史』 神奈川大学言語研

究センター叢書:2 くろしお出版.

- 高田智和 (2011). 「「景観文字」の記録と分析のために」 中井精一・ダニエルロング (編) 『世界の言語景観 日本の言語景観』 桂書房 pp. 149–165.
- R. Landry, and R.Y. Bourhis (1997). “Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: an empirical study.” *Journal of Language and Social Psychology*, 16:1, pp. 23–49.
- 庄司博史・ペートバックハウス・フロリアンクルマス (編) (2009). 『日本の言語景観』 三元社.
- ダニエルロング (2010). 「奄美のことばの言語景観」 内山純蔵・中井精一・中村大・金関恕 (編) 『東アジア内海的环境と文化』 桂書房 pp. 174–200.
- D. Gorter, and J Cenoz (2024). *A Panorama of Linguistic Landscape Studies.*: Bristol: Multilingual Matters.
- Peter. Backhouse (2006). “Multilingualism in Tokyo: A Look into the Linguistic Landscape.” *International Journal of Multilingualism*, 3:1, pp. 52–56.
- B. Spolsky (2009). “Prologomena to a sociolinguistic theory of public signage.” E. Shohamy, and D. Gorter (Eds.), *Linguistic landscape: Expanding the scenery.*: London: Routledge. pp. 25–39.
- Y. Masai (1972). *Tokyo no seikatsu chizu [Living Map of Tokyo]*:. Tokyo: Jiji Tsushinsha.
- Dejan Ivković (2015). “Cyber-Latinica: A Comparative Analysis of Latinization in Internet Slavic.” *Language@Internet*, 12.
- Jannis Androutsopoulos (2012). ““Greeklish” : Transliteration practice and discourse in the context of computer-mediated digraphia.” A. Jaffe and J. Androutsopoulos and M. Sebba and S. Johnson (Ed.), *Orthography as social action: Scripts, spelling, identity and power.*: Boston, MA & Berlin, Germany: De Gruyter Mouton. pp. 359–392.
- 横山詔一・笹原宏之・當山日出夫 (2006). 「文字コミュニケーションにおける異体字の選好と親近度：再検査法による信頼性の検討 (特集) 実験による言語行動の研究」 社会言語科学, 9:1, pp. 16–26.
- 横山詔一 (2012). 「字体選好の地域差に関する計量的研究」 *Language, Information, Text = 言語・情報・テキスト* : 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要, 19, pp. 13–25.
- 高田智久 (2014). 「日本語学習者に対する漢字字形の選好調査：台湾の学習者の場合 (第 45 回研究会, 1. 研究発表)」 *JSL 漢字学習研究会誌*, 6, pp. 44–53.
- Ryota Ishii, Kayoko Nohara, Xinru Zhu, and Giorgio Salani (2024). “Traditional vs simplified: Chinese scripts in the linguistic landscape of Yokohama Chinatown.” *IEICE Tech. Rep.*, 124:119, pp. 25–30.